



阪神・淡路大震災三〇年 特別展「阪神・淡路大震災
を伝える・知らせるー情報と通信の1990年代
ー」展示会を見て（〈特集Ⅱ〉同時代史としての震災
展示：兵庫県立歴史博物館特別展を通して）

霞末, 和範

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 17:110-113

(Issue Date)

2025-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505417>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505417>



阪神・淡路大震災三〇年 特別展「阪神・淡路大震災を伝える・知らせる―情報と通信の1990年代―」展示会を見て

霞末 和範

先般、開催された阪神・淡路大震災に関する展示会を視察いたしました。本展示会は、震災の記憶がどのように伝承されてきたか、多角的な視点から考察するものであり、私自身が震災発生当時、現場でボランティア活動に従事していた経験から、深い関心を持つて臨みました。

展示会を知ったきっかけ

本展示会については、仕事中に博物館の横を通った時に、その開催を認識しておりました。当初より視察を検討しておりましたが、視察予定日の前日である一月一七日に、当時私が所属していたボランティア団体「灘ボランティア」の結成三〇周年同窓会が開催されました。同窓会において、本展示会に「灘ボ

ランティア」関連資料が展示されている旨の情報を得たことで、視察への意欲は一層高まりました。過去の活動が現在に伝承されている事実、強い感慨を覚えました。

「灘ボランティア」における活動と経験

私が所属していた「灘ボランティア」は、震災発生直後の一月末頃より、神戸市灘区の都賀川公園内に活動拠点を設けていたボランティア団体です。主に学生が中心となつて活動しており、当時大学三年生で二一歳であった私も、二月後半ごろより、高校時代の友人の勧誘により参加いたしました。

そこでの私の主な担当業務は、ボランティア依頼情報を項目別に分類し、日々寄せられる依頼内容をコンピュータで集計す

ることでした。当時の元データは現在も保持しており、震災発生当時の状況を示す貴重な資料であると認識しております。

震災支援の一環としてApple社よりPCの貸与が行われており、私はそのPCを活用し、ボランティア名簿および依頼内容のデータベース作成にも従事いたしました。同窓会においてこの件について言及した際、私が保有していたデータは内容がないデータベースの元を保管していたのですが、別のメンバーがデータの入っているデータベースを保管していることが判明し、後日提供を受けました。データが無事に開かれた際には、

深い感動を覚えました。各自が関与した情報やデータを大切に保管していることに感銘を受けるとともに、震災から三〇年の節目に開催された今回の展示会の存在が、このような貴重な情報の再発見に繋がったものと考えております。

展示内容について…報道、市民による記録、そして後世への継承

本展示会は、阪神・淡路大震災がどのように伝えられ、今後どのように伝承されていくのかを、多様な視点から提示しており、新たな発見をもたらすものでした。

まず、「報道」に関する展示は非常に印象的でした。震災発生後の時系列に沿って、報道内容がどのように変遷したかが明確に示されておりました。発生後一週間程度は震災状況や犠牲者数が主要な見出しを占めていましたが、徐々に復興に向けた明るい内容の記事が増加していききました。しかし、「地下鉄サリン事件」を契機に、震災関連報道が著しく減少したことは、当時の記憶とも合致しており、展示された記事からも明らかでした。

次に展示されていたのは、「市民」がどのように情報を伝達しようとしていたかを示す資料群でした。

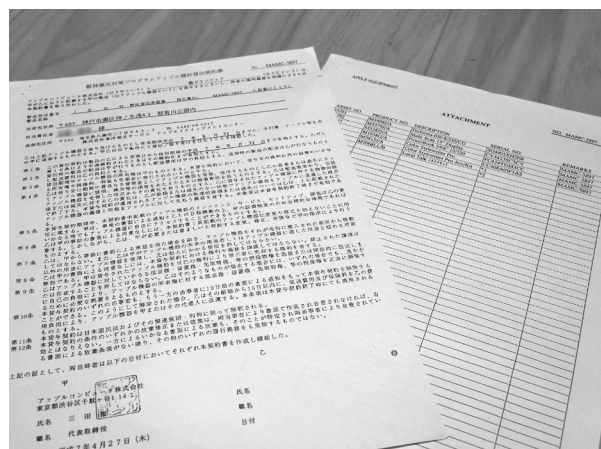


写真 Apple 社との契約書(上)とその保険に関する申込書(下)

各地域や支援団体など、多様なボランティア団体が、それぞれの活動地域における支援物資や炊き出しに関する情報を記載した資料が展示されておりました。その中には、私が所属していた「灘ボランティア」の資料も含まれており、当時の活動がどのように記録として残されていることに感慨を覚えました。当時のボランティア間の連携が不足していたため（後にボランティア協議会として横展開されましたが）、他団体の情報を閲覧する機会は、ほぼありませんでした。今回展示されている情報紙を見ると、各地域が必要としていた情報が類似しており、それらを一堂に確認できたことは非常に有益でした。また、これらの情報を三〇年間にわたり保管し続けている団体が存在することに、深い驚きと感謝の念を抱きました。

最後に展示されていたのは、この震災を「どのように後世に伝えていくか」というテーマでした。詩、紙芝居、写真、語り部の話など、多様な媒体を通じて震災の記憶が継承されていることを認識し、その重要性を再認識いたしました。

展示会から得られたことと、これからの私

今回の展示会を通じて、自身の所属したボランティアの展示があったこともさることながら、現役の学生が多数関与しているという事実を知り、震災当時の大学生として、自身の関与し

たボランティア活動について、より積極的に伝えていくべきであると再認識いたしました。

また、本展示会は、ボランティア活動に従事した側の視点からの情報は多く語られているものの、ボランティアの事務局側の役割に関する言及が少ないことに気づかされる機会でもありました。特に、災害ボランティアという概念が確立されていなかった当時、明確なマニュアルが存在しない中でどのように運営体制が構築されていたかについては、十分に語られていないと認識しております。今後は、当時の内側にいた人間として、これらの経験を伝えていくべきであると考えております。

最後に…

今回の展示会は、複数の偶然が重なり、予期せぬ展開へと繋がりました。職場のお客様に本展示会の話を伺った際、「この展示会の担当者、私の先輩ですよ」との情報を得て、担当者様との面会を依頼いたしました。そして、ご快諾いただき、当時の「灘ボランティア」メンバーとの対話を希望されることとなりましたので、展示会最終日にメンバーと共に視察し、その後、当時の状況について詳細な意見交換を行いました。その後の話ですが、こちらのご担当者様が震災から三〇年も経つのに、当時のボランティアのメンバー間で連絡が取れる状態にあること

に大変驚かれておりました。やはり、震災がそれぞれのメン
バーの中で強烈な出来事、体験であつたということもあります
が、参加したボランティアに所属していたことに誇りもあり、
何よりも楽しかった思い出になっているのが、今日まで繋がれ
ている要因になっているのだと思います。このご縁が契機とな
り、執筆依頼をいただくなど、通常では得難い貴重な経験をさ
せていただきました。ここに改めて感謝の意を表します。